助詞の前方移動
――命題否定と「WHモ」――

小坂光一

1. 「WHカ」と「WHモ」

ドイツ語では否定を表す手段として „nicht“ を使用すること以外に、例えば „niemand“、„nichts“、„nirgendwo“ などを使用することにより名詞句や副詞句などを否定することができる。然るに、日本語では「も」などの助詞の助けを借りることはあるものの、基本的には「ない」、「ぬ」による動詞句の否定以外に否定の方法がない。

（1a） Heute kommt er nicht.
（1b） 今日は彼は来ない。
（2a） Niemand ist da.
（2b） 誰もいない。
（3a） Heute esse ich nichts.
（3b） 今日は何も食べない。
（4a） Morgen fahre ich nirgendwohin.
（4b） 明日はどこへも行かない。

日本語の「誰か」、「何か」、「どこか」などを「WHカ」、上例中の「誰も」、「何も」、「どこへも」のような語句を「WHモ」というふうに形式化することにしよう。ドイツ語の „jemand“ „etwas“、„irgendowo“ などの語及び日本語の「WHカ」、「WHモ」は数値的に「１以上」か「０」かという対概念で考えた場合の「１以上」を意味する。

（5a） Ist jemand da? (１人以上の人間がいるか。最低１人の人間がいるか)
（5b） 誰かいるか。(１人以上の人間がいるか。最低１人の人間がいるか)

(5c)　誰もいない。([１人以上の人間がいる]の否定。[最低１人の人間がいる]の否定)

「WH」を使った文の否定としては次の(7)、(8)の２通りが考えられる。

(6)　誰かがいる。
(7)　―誰かがいない。(「１人以上でかつ全部でない」人間がいない。「１人以上でかつ全部でない」人間の非存在)
(8)　―誰もいない。(０人の人間がいる。「全部」の人間の非存在。「１人以上の人間の存在」の否定)

この(7)と(8)の間にある意味の相違は否定の仕方、すなわち述語否定と命題否定に関係していると思われる。

(7)　誰かがいない
　　１人以上の人間が[[いる]ない]
(8)　誰もいない
　　[１人以上の人間がいる]ない

前者の場合は「１人以上の人間」が「いない」の主語であるのに対して、後者の場合は「１人以上の人間」は「いる」の主語である。すなわち、(8)は「１以上である」ことを否定することにより、「０であること」を表現する方法を採っている。「ない」を日本語の否定のシグナルと考えるならば、上記の記述はさらに次のように抽象化できる。

(7)　誰かがいない
　　１以上の人間が[[いる]$_{NEG}$]
(8)　誰もいない
　　[１以上の人間がいる]$_{NEG}$

前者は述語否定であり、後者は命題否定である。日本語では「１以上」か「０」かの二者択一の場合に「０」の方を選ぼうとすれば命題否定が義務づけられることになる。「Wカ」＋格助詞(この例の場合は「が」)もしくは「WHカ」＋係助詞「は」を使っ

た否定文は命題否定の解釈にはならない。命題否定の実現形としての前提下述語否定を説明する際に、小坂(1992)[1] 及び小坂(2002)[2] では「頻度」を例にして次のような仮説を立てた。

頻度を表現する文断片を前提とした前提下述語否定は、より低い頻度を表す文断片を前提とした前提下肯定が想定できる場合に可能である。しかし、より低い頻度が想定できなければ「は」を使った前提下述語否定は不可能である。

毎日は大学に行かないが、ときどきは行く/たまには行く。(下位の頻度下での前提下肯定が可能)
ときどきは行かないが、[3] たまには行く。(下位の頻度下での前提下肯定が可能)

*たまには行かないが、φ。(下位の頻度下での前提下肯定が想定できないため、命題否定の解釈ができない)[4]

ここでは条件を３段階に設定した。この中で、「たまに行く」の命題否定([たまに行く]の非成立/非存在)[5] の実現形としての前提下述語否定(「たまには行かない」)が不可能なのは「毎日」、「ときどき」、「たまに」という３つの前提のうち、「たまに」は最下位であってそれ以下の前提下での肯定が想定できないからであると説明した。ここでは頻度を３段階に設定したが、これは単なる例に過ぎないのであって、条件となるのは何も「頻度」とは限らないし、段階も３段階に限られる訳ではない。

「WHカ＋ハ」の「WHカ」は「１以上」の意味であり、それよりも下位の前提下での肯定が想定できない。

(全員は/多数はいないが、誰かはいる。)

---

[1] 小坂光一(1992)：『応用言語科学としての日独語対照研究』、第３章。

[2] 小坂光一(2002)：『「成立」と「存在]』、第６章。

[3] ここで意味しているのは「大学に行かない日がときどきはある」の意味ではない。

[4] 「行かない日がたまにある」の意の述語否定の解釈は可能。

[5] 本稿では「成立」と「存在」及び「非成立」と「非存在」を対比的に扱っていないので、煩雑さを避けるために「成立/存在」、「非成立/非存在」のようにひとまとめにして表現する。

＊誰かはいないが、φ。(より下位の前提下での肯定が想定できないため、命題否定の解釈が成り立たない)[6]

2. 「Wカ」＋「ハ」

上の説明そのものは基本的に正しいと思われる。しかし、何故「命題否定」が「前提下述語否定」の形で、「命題肯定」が「前提下述語肯定」という形で実現されるかは上述の説明のみではまだ判然としない。ここでは「毎日」と「ときどき/たまに」が対照を表す助詞「は」で対比されていることになるが、「毎日」と「ときどき/たまに」を対比させること自体にも不自然さが感じられる。

その問題の解決に入る前に、「Wカ」＋係助詞「ハ」を検討してみよう。

(1)　誰かはいない。

否定文に限らず、一般的に言って、格助詞「が]と係助詞「は」は共存しない。すなわち、「は」の方が選択されれば「が」が義務的に消去されるし、「が」が選択されれば「は」が義務的に消去される。

(2)　誰かがはいる→誰かはいる/誰かがいる
(3)　誰かがはいない→誰かはいない/誰かがいない

そしてこのような文における「ハ」は「少なくとも」のニュアンスを表す。すなわち「肯定・否定されるのがそれ以上である」こと、換言すれば、肯定・否定されるものの「下限」を意味する。

(4)　誰かはいる→少なくとも「１人以上の人間」が存在する
(5)　誰かはいない→少なくとも「１人以上の人間」が欠けている

この現象は「WHカ」の場合にに限らず、述語肯定、述語否定に解釈される場合は一般的に当てはまる。その際、「は」には強調アクセントが置かれる。

---

[6] 「誰かがいない」、「１人以上の欠席者がいる」の意の述語否定の解釈は可能。

(6) 週に５日は大学に来る(少なくとも週に５日大学に来る。５日以上大学に来る)

(7) 週に５日は大学に来ない(大学に来ない日が少なくとも週に５日ある。大学に来ない日が５日以上ある)[7]

(8) 私は東京に行きますよ(他の人はともかく、少なくとも私は東京に行く)

(9) 私は東京に行きませんよ(他の人はともかく、少なくとも私は東京に行かない)

(10) *毎日は仕事をします(文そのものが成立しない。その理由については小坂(2002)参照)

(11) 毎日は仕事をしません(「少なくとも」のニュアンスが伴わないのは(「毎日仕事をする」の)命題否定の解釈しか成り立たないことに起因する。小坂(2002)参照)

一方、命題否定の場合は命題そのものは肯定文であり、命題否定に解釈される場合(命題否定から派生した否定文の場合)の「ハ」は「肯定されるのがそれ未満である」こと、すなわち肯定されるものの「上限」を表す。

(12) 週に５日は大学に来ない(「週に５日大学に来る」の命題否定から派生。大学に来るのが「週５日未満」である)

(13) 毎日は仕事をしません(「毎日仕事をする」の命題否定から派生。仕事をするのが「毎日未満」である)

(14) 絶対に全員は来ませんよ(「全員来る」の命題否定から派生。来るのは「全員未満である)

ここから、命題否定の解釈における「ハ」の使用に限界が生じる。それは「肯定されるのがそれ未満である」という解釈ができない場合、すなわち、肯定されるべき「それ未満」が「０」である場合である。日本語にはドイツ語と異なって、「０」を肯定する手段がないから、「０」であることを表現する場合は結局(「誰もいない」のように)「『１以上』であることを否定する」、という手段を用いることになる。一方、ドイツ語などでは(„Niemand ist da.“ のように)「『０』を肯定する」、という手段

[7] 「週に５日は大学に来る」の命題否定の解釈の場合は「少なくとも」の解釈が成り立たない。

を用いる。

(15)　３人は来ませんよ(「３人来る」の命題否定から派生。来るのは「３人未満」、すなわち「２人もしくは１人」である)
(16)　２人は来ませんよ(「２人来る」の命題否定から派生。来るのは「２人未満」、すなわち「１人」)
(17)　＊１人は来ませんよ(０以外の「１人未満」が想定できないので命題否定の解釈が成り立たない)

０以外の「それ未満」が想定できない場合は助詞「ハ」を「モ」に変えなければならない。

(18)　１人も来ませんよ(来るのは「１人未満」、すなわち「０人」)

この場合、「来ないのが１人」という述語否定の解釈は成り立たない。(18)は「１人が来る」の命題否定からの派生であり、「肯定されるのが１人未満」すなわち「肯定されるのが０人」と同様の意味を持つ。肯定されるのが「０」の場合は数量的な解析を必ずしも必要としない。すなわち、「０」であるか「０でない」かの判断で済むことになる。ところが、すでに述べたように、ドイツ語と違って日本語には「０を肯定する」手段がない。従って、「０」であることを表すために、「『０でない』ことを否定する」、すなわち「『１以上である』ことを否定する」という手段を用いることになる。具体的には「WH モ＋否定」という手段が用いられることになる。

(19)　１人も来ませんよ(来るのは「１人未満」すなわち「０人」)
(20)　誰も来ませんよ(「誰か」＝「１人以上」。来るのは「１人以上」でない。すなわち「０人」)

3.　助詞の前方移動

然らば、助詞「モ」は何を意味するのだろうか。助詞「モ」は基本的にはドイツ語の „auch“ に相当すると思われる。しかし、それについて論じる前に「助詞の前方移動」について述べたいと思う。

久野(1973)は「対照を表す『ハ』の転移とでも言える現象」[8] について次のように述べている。

> 雨ハ降ッテイマスガ、傘ハ持ッテ行キマセン。
>
> では、「雨」と「傘」が対照されているのではない。「雨ガ降ッテイル」と「傘ヲ持ッテイキマセン」が対照されているのである。この文は
>
> 雨ガ降ッテハイマスガ、傘ヲ持ッテハ行キマセン。
>
> の二つの「ハ」が転移して、文頭に移ってきたものらしい。

より正確には「雨ガ降ッテイル」と「傘ヲ持ッテ行ク」の対照と言うべきだと思うが、それについては後述することにして、まずこの久野の発想を本稿でも応用してみようと思う。

(1)　毎日は大学に行きません。

この文は「毎日大学に行く」の命題否定から派生したものである。すなわち、命題否定の実現形としての前提下述語否定である。従って、命題の内部においては「ハ」は使用されない。

(2)　*毎日は大学に行く。

命題否定の実現形としての前提下述語否定の成立過程を「命題に付加された助詞の前方移動」という観点から説明するならば次のようになろう。

(3)　毎日は大学に行かない。

(3a)　[毎日大学に行く]は成立/存在しない(が、[毎日未満の頻度で大学に行く]は成立/存在する)
→[毎日大学に行く]はしない
→[毎日大学に]は行かない
→[毎日]は大学に行かない

---

[8] 久野　(1973)：『日本文法研究』、S. 31。なお、S. 207 も参照。

係助詞、副助詞と言われる助詞の中にはこのような前方移動指向の性格を有すると思われるものがいくつかある。前方移動の過程は例えば次のように考えることができる。

(4)　太郎は勉強ばかりしている。

(4a)　[太郎が勉強している]ばかりが存在する
太郎は[勉強している]ばかりだ
→太郎は[勉強して]ばかりいる
→太郎は[勉強]ばかりしている

(5)　次郎は文句ばかり言っている。

(5a)　[次郎が文句を言っている]ばかりが存在する
次郎は[文句を言っている]ばかりだ
→次郎は[文句を言って]ばかりいる
→次郎は[文句」ばかり言っている

(4)、(5) の場合は「ばかり」の前方移動と解釈するのが自然と思われるが、「ばかり」が初めから目的語「勉強」、「文句」に付加されたものと考えることも可能であろう。しかし、次の(6)の場合、動詞「つく」は「うそ」以外の目的語とは結びつかないのから、「『うそ以外のもの』をつく」ことはありえない。従って、「うそ」を「ばかり」で限定する必要はない。(6)は明らかに「ばかり」の前方移動の結果である。

(6)　三郎はうそばっかりついている。
(6a)　[三郎がうそをついている]ばかりが存在する
三郎は[うそをついている]ばかりだ
三郎は[うそをついて]ばかりいる
三郎は[うそ]ばかりついている

一方、次の(7)の場合は「ばかり」の前方移動ではないと考える方が自然である。

(7)　あの店はいいものばかり売っている。

(7a) *[あの店がいいものを売っている]ばかりが存在する
*あの店は[いいものを売っている]ばかりだ
*あの店は[いいものを売って]ばかりいる
あの店は[いいもの]ばかりを売っている

さて、命題否定の実現形としての前提下述語否定の成立過程を我々はこれまで以下のように考えた。[9]

(8) 毎日は大学に行かないが、ときどき/たまには行く。
(9) ときどきはいかないが、たまには行く。
(10) *たまには行かないが、φ。

これは「助詞の前方移動」の観点から考えた場合、以下の構造を有すると考えられる。

(8a) [毎日大学に行く]は成立/存在しない(が、[毎日未満の頻度(「ときどき」/「たまに」)で大学に行く]は成立/存在する)
(9a) [ときどき大学に行く]は成立/存在しない(が、[「ときどき」未満の頻度(たまに)で大学に行く]は成立/存在する)
(10a) *[たまには大学に行く]は成立/存在しない(が、*[「たまに」未満の頻度で大学に行く]は成立/存在する。「たまに」以下の頻度ということは頻度0を意味することになるので、この文は成立しない)

換言すれば、対比されているのは「毎日」と「ときどき/たまに」ではなく、「毎日行く」と「ときどき/たまに行く」であり、さらには「ときどき」と「たまに」ではなく、「ときどき行く」と「たまに行く」である。ここでは頻度を例にしたが、これらの頻度を、「毎日行く」を3、「ときどき行く」を2、「たまに行く」を1のように数値化してみればよりはっきりする。

(11) 3は成立/存在しないが、2は成立/存在する
(12) 2は成立/存在しないが、1は成立/存在する

[9] 詳しくは小坂(1992)の第3章及び小坂(2002)の第6章及び本稿の第1章参照。

（13）＊１は成立/存在しないが、（＊０は成立/存在する）

4. 助詞「モ」＋否定

これまで述べたことは要するに、ある条件下で否定するにはそれ未満の条件下での肯定の可能性が必要であるということであった。

すでに示唆したことであるが、日本語の助詞「モ」の基本的な意味はドイツ語の „auch“ に相当するものであると想定する。すなわち、「お酒は飲むが、ビールも飲む」、「勉強はしないし、仕事もしない」などにおける「モ」である。少しく抽象化するならば、「A だけでなくB も」における「モ」である。これを「モ」を使った否定に応用してみよう。

（1）　３は成立/存在しないが、２も成立/存在しない
（2）　２は成立/存在しないが、１も成立/存在しない

結局「１も成立/存在しない」と言うことによって「成立/存在するのが０である」ことが表現されることになる。これを「頻度」に当てはめると、具体的には次のようになる。

（3）　[毎日大学に行く] は成立/存在しないが、[ときどき大学に行く] も成立/存在しない
（4）　[ときどき大学に行く] は成立/存在しないが、[たまに大学に行く] も成立/存在しない

これをさらに、「ハ」・「モ」の前方移動という手段を使って前提下述語否定に変形させれば以下のようになる。

（3a）（もちろん）毎日は大学にいかないが、ときどき（すら）も大学に行かない。
（4a）（もちろん）ときどきは大学に行かないが、たまに（すら）も大学に行かない。

従って、「１人もいない」の成立過程は次のようになろう。

(5)　(もちろん)[２人以上がいる]は成立/存在しないが、[１人がいる](すら)も成立/存在しない
[１人がいる](すら)も成立/存在しない
→「も」の前方移動
→[１人が](すら)もいない
→格助詞「が」の消去[10]
→[１人]もいない

「WHカ」の場合は「１以上」という１段階しか表さないので、「２は成立/存在しないが、１も成立/存在しない」のうちの「１も成立/存在しない」の部分だけが残る。よって、例えば「誰も来ない」の成立過程は次のようになる。

(6)　[誰か(１人以上で、最低１人)が来る](すら)も成立/存在しない
→[誰か(１人以上で、最低１人)が](すら)も来ない
→格助詞「が」の消去
→[誰か](すら)も来ない
→「カ」の消去[11]
→[誰]も来ない

このように考えると、次の(7)の成立過程も説明できる。

(7)　この仕事をするのに、A 君は３時間もかかるが、B 君は１時間もかからない。
(7a)　３時間もかかる。
([２時間かかる]は成立/存在するが)[３時間かかる](すら)も成立/存在する
→「モ」の前方移動

[10] 格助詞「が」と係助詞「は」・「も」が連続した場合は格助詞が義務的に消去される。従って、「～には」「～へも」などの場合とは異なって、「～がは」、「～がも」の組み合わせは存在しない。

[11] 「カ」消去の過程に関しては未研究である。

→[３時間かかり](すら)もする
→「モ」の前方移動
→[３時間]もかかる

(7b)　１時間もかからない。
([２時間かかる]は成立/存在しないが)[１時間かかる](すら)も成立/存在しない
→「モ」の前方移動
→[１時間かかり](すら)もしない
→「モ」の前方移動
→[１時間]もかからない

あるいは
([２時間かからない]は成立/存在するが)[１時間かからない](すら)も成立/存在する
→「モ」の前方移動
→[１時間かからない](すら)もする
→「モ」の前方移動
→[１時間]もかからない

5. 補　足

ここで、久野(1973)の次の例文に関連して補足したい。

(1)　雨ハ降ッテイマスガ、傘ハ持ッテ行キマセン。

ここで対照されているのは久野(1973)が言っているように、「雨」と「傘」ではなく、「雨が降っている」ことと「傘を持って行く」ことである。[12] 前者を肯定し、後者を否定している。抽象化すればひとまず次のようになろう。

(1a)　[雨が降っている]は成立/存在するが、[傘を持って行く]は成立/存在しない

[12] 久野自身は「雨が降っている」と「傘を持って行きません」が対照されている、と述べている。

→[雨が降ってい]はするが、[傘を持って行き]はしない
→「ハ」の前方移動
→雨が降ってはいるが、傘を持っては行かない
→「ハ」の前方移動
→雨がは降っているが、傘をは持って行かない
→格助詞の消去
→雨は降っているが、傘は持って行かない

しかし、必ずしも「一方が肯定で他方が否定」という構造を取らない対比もあるように思われる。すなわち、「命題肯定＋命題肯定」、「命題否定＋命題否定」の組み合わせの場合である。

(2) お金は十分ありますが、土地は売り払いました。
(3) お金はありませんが、土地は絶対に売りません。
(4) 天気は悪いが、ハイキングは続行する。
(5) 天気は良くないが、運動会は中止しない。

このような場合は、例えば

(2a) [お金が十分ある]は成立/存在するが、[土地を売り払う]は成立した/[土地を売り払った]は存在する

のような解釈はいささか不自然な感を残す。これは対立の構造の違いに起因するのではないだろうか。「A は[肯定]だが、B は[否定]だ」におけるような(接続語としての)「ガ」の場合は確かに対立が明確であるように見えるが、対立の仕方にもヴァリアンテがあるように思われる。すなわち、以下のようなヴァリアンテである。

① 命題内容の対立（A が肯定されれば、B は必然的に否定される。A と B が両立しない。A と B の一方のみが成立/存在する）
② 想定される帰結との対立（A と B が両立し得る。一方が成立/存在(肯定)し他方が非成立/非存在(否定)の場合だけでなく、A と B の両方が成立/存在、

もしくは非成立/非存在し得る。接続語としての「ガ」は「それにもかかわらず」、「想定される帰結に反して」の意味を有する）

このうち、①に関してはすでに前章までにおいて述べた通りである。②というのは次のような場合である。

(2)　お金は十分ありますが、土地は売り払いました。

[お金が十分ある]A⇒(想定される命題)[土地を売らない]B
→[お金が十分ある]A は成立/存在する ⇒ (それにもかかわらず)[土地を売る]B は成立した/[土地を売った]B は存在する
→「ハ」の前方移動
→お金は十分ある。それにもかかわらず土地は売り払った
→お金は十分あるが、土地は売り払った

(3a)　お金はありませんが、土地は絶対に売りません。

[お金がない]A⇒(想定される命題)[土地を売る]B
→[お金がある]A は非存在だ ⇒ (それにもかかわらず)[土地を売る]B は非成立/非存在だ
→お金はない。それにもかかわらず土地は売らない
→お金はないが、土地は売らない

久野(1973)の例もこれに属する。従って、(1a)は次の(1b)のように解釈する方がいいように思われる。

(1)　雨ハ降ッテイマスガ、傘ハ持ッテ行キマセン。

(1b　[雨が降っている]A⇒(想定される命題)[傘を持って行く]B
→[雨が降っている]Aは成立/存在する⇒(それにもかかわらず)[傘を持って行く]B は成立/存在しない
→[雨が降ってい]はするが、[傘を持って行き]はしない
→「ハ」の前方移動

→雨が降ってはいるが、傘を持っては行かない
→「ハ」の前方移動
→雨がは降っているが、傘をは持って行かない
→格助詞の消去
→雨は降っているが、傘は持って行かない

さらに、上記の①、②とは異なった次のような対照もある。

(6)　今日は天気が悪いが、明日は晴れる。
(7)　私は東京へ行くが、彼は福岡へ行く。

この場合、確かに[天気が悪い]ことと[晴れる]ことの間、及び[東京へ行く]ことと[福岡へ行く]ことの間には対立がある。しかし、[今日天気が悪い]ことと[明日晴れる]ことの間、及び[私が東京へ行く]ことと[彼が福岡へ行く]ことの間には対立はない。このような場合は命題間の対照ではなく、「今日」と「明日」、「私」と「彼」の対照と考え、「ハ」の前方移動の考えを適用させない方が処理が楽であるように思われる。すなわち、(6a)よりも(6b)の解釈の方が自然な感じがするし、処理も楽である。しかも接続助詞「ガ」は「対立」を表すののではなく、「並列(並存)」を意味するものである。

(6a)　[今日天気が悪い]A は存在する。そして、[明日晴れる]B は成立/存在する
(6b)　今日は[天気が悪い]が存在する。そして、明日は[晴れる]が成立/存在する

この場合の助詞「ハ」は命題に付加されたものではなく、初めから特定の文断片に付加されたものと考える方が簡潔になる。その最たるものは次の(7)であろう。この場合は「魚」と「肉」の対比としか考えられないし、従って、「ハ」の前方移動も適用できない。「ハ」は初めから「魚」や「肉」に付加されたものであると考える方が自然であろう。

(7)　魚は鯛がいいが、肉は牛肉がいい。

６．述語肯定/否定と命題否定

本稿では「WHモ～ナイ」を「WHカ＋述語」の命題否定という観点から検討した。しかし、一般的には(例えば辞書における記述などでは)「WHモ」は「全部」を意味するとされている。その場合は、「０」を意味する「WHモ～ナイ」は「全部～ナイ」という述語否定から派生しているということになる。

(1)　[誰も来ない]＝[[全員が][来ない]]
(2)　[何もない]＝[[全部が][ない]]
(3)　[どこへも行かない]＝[[すべての場所へ][行かない]]

この説明は次のような肯定文の説明には非常に便利である。

(4)　誰もが知っている。（全員が知っている）
(5)　彼はいつも留守だ。（全ての時間において留守だ）
(6)　連休中はどこも満員だ。（全部の場所において満員だ）

しかし、次の文の非許容性を説明できない。

(7)　*彼は何も(を)許容する。(全部を許容する)
(8)　*何もがある。（全部がある）

「モ」の前に「デ」を入れれば(7)や(8)も許容される。[13]

(4a)　誰でもが知っている。（全員が知っている）
(5a)　彼はいつでも留守だ。（全ての時間において留守だ）
(7a)　彼は何でも許容する。(全部を許容する)
(8a)　何でもある。（全部がある）

逆に、「モ」の前に「デ」を入れることにより許容度が下がる場合もある。

(3a)　*どこへでも行かない。

[13] 「どこでも」の「デ」は場所を表す助詞と解釈されるため、ここでは次の文を省いた。
(6a)連休中はどこでも満員だ。（全部の場所において満員だ）

「WH(デ)モ」が許容される場合に関しては、「WH(デ)モ」を「WHであろうとも」で一般化することにより、述語肯定も述語否定も説明できるが、「WH(デ)モ」が「全部」を意味するに至る過程、ないしは「モ」が使用されるに至る過程は明らかにならない。

誰(で)も知っている（誰であろうとも知っている）
誰も知らない（誰であろうとも知らない）
彼はいつ(で)も留守だ（いつであろうとも留守だ）
彼はどこへ(で)も行く（どこであろうとも行く）
彼はどこへ(*で)も行かない（どこであろうとも行かない）

また、次の文は述語否定の観点からは説明しにくい。

(9)　１人もいない。

(9)の場合は、すでに本稿の第４章「助詞『モ』＋否定」の箇所で述べたように、命題否定の観点からの説明の方が容易である。

(9a)　[１人がいる](すら)も成立/存在しない

しからば、上述の例文(4)、(5)、(6)(いずれも肯定文)は本稿の観点からはどのように説明できるであろうか。本稿の観点を要約してくり返せば次のようになる。

① 「WHカ」は「１以上」を意味する
② 「WHモ～ナイ」は「[WHカ(１以上)]の命題否定＋「モ」の前方移動」から派生する

これを(4)、(5)、(6)に応用すれば以下のようになる。

(4)　誰もが知っている。
([全部の人が/多くの人が/何人かの人が知らない]は成立/存在しないが)[誰か(＝「１人以上で、最低１人」)が知らない](すら)も成立/存在し

ない
→ 全部の人間が知っている

(5) 彼はいつも留守だ。
([彼が全部の時間に/多くの時間に/ときどき在宅している]は成立/存在しないが)[彼がいつか(=「1回以上で、最低1回」)在宅している](すら)も成立/存在しない
→ 彼は全部の時間において非在宅だ→常に留守だ

(6) 連休中はどこも満員だ。
([全部の場所において/多くの場所において/いくつかの場所において空いている]は成立/存在しないが)[どこか(=「1箇所以上で、最低1箇所」)において空いている](すら)も成立/存在しない
→ 全部の場所において満員だ

重要なのは「どちらの説明方法がより効率的であるか」である。どちらにせよ未解決の問題は多々ある。これらは今後の課題である。